Trends and Future Issues in Qualitative Research on Mother's Negative Feelings Toward Child-rearing
2023 Vol.25 p.71 - p.82

乳幼児の母親が抱く子育てへの否定的な感情に関する質的研究の動向と今後の課題

河田　あかり　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科
山田　美穂　お茶の水女子大学　基幹研究院／コンピテンシー育成開発研究所

要約

本稿では，子育てへの否定的な感情を抱く母親の主観的体験に寄り添った質的研究とはどのようなものなのかを検討することを目的として，文献展望を行い，母親の子育てや子どもに対する否定的な感情を扱った研究の動向と，インタビュー調査によって否定的な感情を抱える母親の主観的体験を検討した質的研究を概観し課題をまとめた。その結果，展望した質的研究から，否定的な感情と関連する要因を含めた分析，子育ての「今」について尋ねる工夫，母親の心情のより詳細な検討，より多様な母親を対象とした検討の必要性が課題として抽出された。加えて，今後の研究では，否定的感情の親としての発達や適応に寄与するといった機能面だけではなく，母親から語られた主観的体験のありのままを丁寧に検討し記述する研究が必要だと考えられる。

キー・ワード：母親，子育て，否定的感情，質的研究，文献展望

Ⅰ　問題と目的

1. 子育てに対する否定的な感情を持つ親の増加

核家族化や少子化の進展により，家族のつながりや地域社会の連帯感が希薄化し，孤立した子育てをする母親が増えていることが指摘されている（河野・大井, 2014；小川他, 2013；島田他, 2018）。実際に，ベネッセ教育総合研究所の調査では，母親が家を空ける際に，子どもの面倒をみてもらうために同居家族以外の人や機関・サービスを利用することは減少傾向にあり，母親が家を空ける時に子どもの面倒をみるのは父親が 8 割を超えており（ベネッセ教育総合研究所，2022），子育て世帯の孤立化がうかがえる。また，COVID-19 の流行によって，現在は子育ての孤立化及び子育て世帯と地域社会との関係の希薄化がより課題となっていると考えられる。

少子化や核家族化に伴う親の孤立化は，育児に対する不安や負担を増加させる一要因となっている（富岡他，2005）。実際に，孤独感の高い母親は育児への負担感が高いことも示されており（佐藤他，2014），近年，子育てに対して否定的な感情をもつ母親が増加している傾向にあることも指摘されている（厚生労働省，2003）。平成 18 年度に行われた厚生労働省の調査によると，幼児期の子どもを育てる親の 82.6%が「子どもを育てていて負担に思うことや悩みがある」と回答していた（厚生労働省，2007）。加えて，ベネッセ教育総合研究所による首都圏の 1 歳 6 ヶ月以上の未就学児を育てる保護者を対象とした調査では，2015 年から 2022 年にかけて，子育てへの肯定的な感情は減少

している一方で，子育てに対する否定的な感情は 10 ポイント以上増加している（ベネッセ教育総合研究所，2022）。このような社会的背景を受け，厚生労働省は，健やか親子 21（第 2 次）として「すべての子どもが健やかに育つ社会」の実現をめざし，「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」と「妊娠期からの児童虐待防止対策」の 2 つの重点課題を掲げて取り組んでいる（厚生労働省，2014）。このような社会的課題のためにも，子育てに対する否定的な感情に関する研究は急務であると考えられる。

2. 母親の主観的体験を扱う研究の不足

前述した社会的背景を受け，育児不安や育児ストレス等の育児への否定的な感情は，虐待や少子化などの社会問題の背景要因や子どもの育ちと家族全体のウェルビーイングにかかわる重要な研究課題として，多くの心理学者による研究が蓄積されてきている（佐藤，2015）。一方で，育児不安や育児ストレスを抱えた母親を対象とした研究では，子育てという体験は母親が経験するストレスや不安，適応の程度等の量的変数に還元され，理解されてきた（Harold & Bolea, 2000；大日向，1991；Raeff, 1994；Sabatelli & Waldron, 1995）側面があり，子育てそのものや育児困難にまつわる母親の複雑な主観的体験や詳細な状況は明らかにされていないという指摘がなされている（浅賀・三浦，2008；東他，2009；Phoenix & Woollet, 1991）。浅川他（1999）は，価値観の多様化，核家族化等が進んだ今日の育児の問題を考えるにあたっては，育児の担い手である母親の主観的な現実に寄り添っていく観点からのアプローチが不可欠だと指摘している。したがって，これからの子育てに対する否定的な感情を検討する研究では，母親の主観的な体験に寄り添い，その複雑さや詳細を明らかにするための質的な研究が必要であると考えられる。

また，育児不安・育児ストレス研究によって，母親自身を心理学研究の主題とする必要性が論じられるようになり，現在では母親に対する臨床心理学的支援も心理学が大きく貢献すべき分野となっている（岩堂・松島，2008）。子育てに対する臨床心理学的支援としては，母親が感じている困難感を受容しながら，母親が自身の気持ちの抱え方や子どもの捉え方を考えるための助言が求められている（荒牧，2016；金城，2015）。よって，子育てに対する臨床心理学的支援でも，母親の子育てに対する否定的な気持ちや体験に寄り添う支援が求められており，臨床心理学領域における子育て研究にも，母親の主観的体験に寄り添った研究が必要だと考えられる。しかし，本邦での否定的な感情を抱く母親の主観的な体験を扱った質的研究は少ない。

3. 本稿の目的

そこで，本稿では子育てに対する否定的な感情に関する心理学的先行研究を概観することを通して，母親の主観的体験に寄り添った質的研究とはどのようなものなのかを検討することを目的とする。具体的には，まず，量的研究も含めた子育てに対する否定的な感情についての先行研究の動向を概観する。そして，少ないながらも存在する，子育てもしくは子どもに対する否定的な感情を抱く母親の主観的体験の質的データを扱った研究を概観し，どのようなことが明らかになっているのか，より母親の主観的体験に寄り添った研究をするための研究上の課題とはどのようなものなのかを検討する。

尚，本稿では，育児ストレス，育児不安，子育ての負担感等の子育てもしくは子どもに対して感じるネガティブな感情を“子育てへの否定的な感情”と総称し，そのような感情についての質的データを扱った研究を概観する。また，日本では父親に比べて母親が子育てや家事に時間を割いている現状があり，その差は他国と比べても著しい差となっている（内閣府，2015；内閣府，2016）。そ

して，東京都福祉保健局（2003，2005）による児童虐待の実態調査によると，日本における児童虐待を行った母親の心身の状況は精神疾患や薬物・アルコール乱用など，特に欧米で問題となるものの割合が低く，「特に問題なし」とされる割合が高くなっている。このようなことから，日本の母親は独特の子育てに対する否定的な感情を抱いていると考えられる。加えて，厚生労働省の調査によると，虐待を受けた子どもの年齢割合は0歳から学齢前の子どもが最も多く，虐待加害者となっているのは実母が最も多い（厚生労働省，2020）。したがって，本稿では日本国内における文献の中で，特に乳幼児を育てる母親が抱く子育てに対する否定的な感情を扱った研究を展望していく。

Ⅱ　否定的な感情に関する先行研究の動向

1. 否定的な感情に関する量的研究の動向

子育てに対する否定的な感情は，1970年代頃子ども殺害・虐待の要因の一つとして，母子関係の病理“育児ノイローゼ”としてマスコミで取り上げられ始め（川井・庄司，1995），1980年代から子育てに悩む母親の問題が社会的関心を集めることが多くなった。そして，“育児不安”，“育児ストレス”，“育児困難”などといった概念が生まれ，今日まで研究が盛んに行われてきた（吉田，2012；中山他，2013）。

本邦での“育児不安”・“子育て不安”をキーワードとする文献を対象として，育児不安の要因を検討した京藤（2023）では，育児不安と関連のある要因は，子どもの数・年齢・発達・気質や性格などの特徴といった子どもの要因と，母親の年齢・出産経験・性格や認知・ライフコースといった母親の要因と，ソーシャルサポート・パートナーとの関わり・パートナー以外との関わりといったサポート要因の3つに大別されるとしている。また，本邦における乳幼児をもつ母親の“育児ストレス”の関連要因について文献検討を行った前田・中北（2017）では，先行研究にて育児ストレスと関連が示された要因として，母親の年齢・就労形態・婚姻年数，子どもの年齢・人数といった属性と，妊娠・出産への思い・子育てに関する意識・自分のための時間の有無・産後の経過と母親自身の体調といった子どもを持つことでの生活・意識の変化と，周囲からのサポートや経済的側面といった生活環境という3つの要因に大別し考察している。このように，子ども・母親・子育て環境といった様々な観点から育児不安や育児ストレスの要因が明らかにされてきた。一方で，育児不安や育児ストレスが影響を与えるものとして，親の精神的健康および養育態度（岡本他，2020）・養育行動(Liu & Wang，2015)，そして，子どもの情緒的・行動的問題（石・桂田，2008）などが明らかにされてきており，育児不安や育児ストレスを何らかの変数の要因として扱う研究も多数見られる。

2. 量的研究が残している課題

1）母親の主観的体験の軽視

育児不安や育児ストレスに関する研究では，子育てへの否定的な感情を特に育児ノイローゼや虐待の要因として扱う（村上他，2005；内閣府，2007）ことが多かった。そして，育児に不安やストレスを抱えた母親を対象とした研究では，先述した通り，子育てという体験は母親が経験するストレスや不安，適応の程度等の量的変数に還元され，理解されてきた（Harold & Bolea，2000；大日向，1991；Raeff，1994；Sabatelli & Waldren，1995）側面がある。一方で，東他（2009）は，育児困難にまつわる母親の複雑な心理や詳細な状況は明らかにされていないという指摘をしている。

子育てに対する否定的な感情についての研究のみならず，子育てに焦点を当てた研究全般においてその課題は指摘されている。子育てに関する心理学的検討が盛んに行われてきた発達心理学において，母親は子どもの発達に影響をおよぼす環境要因として捉えられることが一般的であった（柏木，1995；中山，1994；戸田，1996）。そして，

母親が，子どもを育てる経験を日々の生活や人生の中でどのように捉え，意味づけているかという問題は研究の主題として扱われてこなかった（Phoenix & Woollet，1991）という指摘がなされている。浅賀・三浦（2008）も母親を主題とした研究は，子どもの発達への影響因として母親像を追うことから抜け出し，母親自身を理解する方向へと転換していく必要があることを述べた。つまり，従来の子育てに関する研究では，子育て中の親，特に母親の行動や思いは子どもの発達や不適応的な養育行動の要因として量的変数に還元され扱われることが多かったが，これからの子育てへの否定的な感情に関する研究では母親の主観的体験や心理的体験の詳細を検討することが求められていると考えられる。

2）母性役割の強調

特に，日本では，「子どもをかわいいと思わない親」「子どもよりも自分のことを優先に考える親」はあってはならない存在のように非難されてきた（山田，1997）社会的背景や子どもや育児に対する否定的感情は持ってはならないものとされてきた（菅野，2001）社会的意識がある。しかし，大日向（1991）や牧野（1982）は，母親の子育てに対する否定的態度が母親個人の責任にあるのではなく，母性神話や伝統的性役割といった社会的価値観や社会構造によってもたらされていることを明らかにした。平成 10 年版の厚生白書では，いわゆる三歳児神話や母性役割の強調が，子育てについて母親に過剰な期待や責任を負わせており，それが子育てのストレスや負担感につながっているとの問題認識が示され，三歳児神話は「少なくとも合理的な根拠は認められない」と公に否定された（厚生労働省，1999）。

一方で，母親を研究テーマとした先行研究は母性神話の影響を受けたものも多く（大島，2013），それらの先行研究が母性神話に加担し強化する役割を果たしたことは否めない（柏木，2003）と指摘されている。Swigart（1991 斎藤訳 1995）は，近代の乳幼児研究が，母親の“あるべき姿”や“成すべきこと”のみが強調されるようになった反面，育児の担い手である母親の情緒や内的世界への理解はなおざりにされてきたと述べた。

このようなことから，子育てへの否定的な感情に関する研究では，否定的感情をあってはならないものとするのではなく，抱いて当然であるという立場に立ち，偏った母親のあるべき姿や理想像を押し付けてはいないか常に留意することが必要であると考えられる。

Ⅲ　否定的な感情に関する質的データを扱った研究の概観

1. 本稿にて展望する質的データを扱った研究

本稿では，質的データを扱った研究の中で，次記の条件に該当する文献を展望した。①乳幼児を育てている母親が対象であること，②母親本人に対して個別のインタビューを実施していること，③若年母や子どもが発達障害児や医療的ケア児である等の特別な属性を対象の要件としていないこと。なお，条件の中でもより幅広い研究を概観するため，紀要も含めている。

2. 研究目的から見る質的研究の概要

子どももしくは子育てに対する否定的な感情に関する質的研究を概観すると，研究の目的を 4 つに分類し整理することができるのではないかと考えた。そこで，以下に目的の分類と各研究の概要，類似した目的を有する研究同士の共通点，そして，目的別にどのようなことが明らかになったのか述べていく。

1）否定的な感情の具体的内容の検討

武井他（2008），足立（2016），澤田他（2020），渡邉（2015）では，母親が感じている子育てに対するネガティブな思いの具体的な内容を探索的に検討していた。そして，前者 3 つの研究ではさらに，子どもの月齢や特性，育児の状況等の背景要因からその具体的内容を検討しており，渡邉

（2015）では，母親達の語りから得られた具体的内容をもとに尺度作成を行うことを目的としていた。

武井他（2008）では，①養育者はどのような子どもの気質特徴に起因して育児不安を感じるのかを明らかにすること，②子どもの気質特徴がどのような状況と重なると養育者の育児不安を生起させるのかを知る手がかりを得ること，③育児不安に関する養育者の認知，とくに原因帰属と対処方法を特定することという 3 点を目的として，1 歳を過ぎた幼児を育てる母親 12 名を対象としてインタビュー調査と分析を行った。その結果，思い通りにならないと激しく感情を表すといった，子どもの否定的感情反応に対して母親が育児不安を感じることが多く，子どもの気質的特徴そのものよりも，子どもの特徴や行動によって養育者自身の行動が中断したり，予定していた状況が妨げられると，育児不安を感じることが示唆された。育児不安に対する原因帰属については，対象者の多くが自身の考え方や体調に帰属しており，この原因帰属に固執してしまうと対処不能感を高め，自己効力感が低下し育児不安が高まる可能性があると考察されていた。また，育児不安を感じる状況を回避する方法として，周囲のサポートを得ることや好きなことをして過ごすことが母親達からは語られていた。そして，武井他（2008）は，この結果を受けて専門家からの支援として，養育者が選択した育児行動を認める等，養育者の対処不能感を低減し，自己効力感を高め，自信を持って育児にのぞむことができるサポートが必要であると述べていた。

足立（2016）では，第一子における産後 4 ヶ月頃までの期間に母親が育児で感じる困難とその背景，そしてその困難の軽減や解決に影響した事柄の仮説的モデルを導き出し，その結果を踏まえ，産後から 4 ヶ月頃までに必要な地域における支援の在り方について考察することを目的として，1～3 歳の子どもを育てる核家族の母親 6 名にインタビュー調査を行っていた。分析の結果，初産婦が産後 4 か月の頃までに育児で感じる辛さは，〔児への戸惑い〕〔初めての育児体験〕による【児への対応】，〔一人で対応〕しなければならない状態や，〔交流がない〕状況や，〔外出への不安〕が関係する【孤独感】，〔対応の悪さ〕や〔問題解決に至らない情報〕などによって生まれる【不満】，そして，【身体の不調】が見いだされた。そして，辛さの軽減や解決に影響したものは，〔レスパイト〕〔クールダウン〕〔傾聴〕〔気軽さ〕〔身近〕〔モデル〕の要素を含む【親族のサポート】，〔専門職者との良好な関係〕により安心感が生まれ，〔専門職の対応〕により身体面の改善につながる【専門職の関わり】，育児の軌跡から発育や健康への〔見通し〕が立つことで安心につながる【経験者の実例】であることが示された。この結果から，考察では専門職の対応の改善および支援システムの構築の必要性と，訪問事業や地域子育て支援事業の有用性と効果的な支援に向けた工夫の必要性が考察では述べられていた。

澤田他（2020）では，核家族世帯の母親が産後 1 ヶ月から 4 ヶ月までの期間にどのような育児ストレスを抱き，それにどのように対処してきたかを明らかにするために，4 ヶ月健診のために来所した核家族世帯の母親の中で，単体正期産であった 20～34 歳の母親 11 名を対象にインタビュー調査を実施した。分析の結果，育児ストレスは，【母乳育児に対する苦悩】，【子どものペースに合わせることへの負担】，【2 人の子どもと関わる中で生じる戸惑い】，【1 人で育児を抱え込む気負い】に大きく分けられ，対処行動として，母親は【周囲の頼れる存在を認知し自ら関わり頼る】ことや，【母親自身で対応し自己完結する】ことをしていることが明らかになった。考察として，母親の誰もが育児ストレスを持ち得るものであることを医療者は認識し，母親が適切な対処行動をとれているかに焦点をあて，必要時に専門職のサポートを受けられる方法を育児ストレスの内容と併せて具

体的に情報提供することの重要性が示唆されていた。

渡邉（2015）は，虐待不安の具体的な内容を母親達の語りから探索的に検討し，虐待不安尺度項目案を作成することを目的として，0~5 歳児を育てている母親 21 名を対象としてインタビューを行った。虐待不安とは，育児不安の下位概念であり，“育児の中で感じられる不安のうち虐待に対する漠然とした不安や恐れを伴う状態”と定義されている（庄司，2003）。調査の結果，21 名中 5 名が虐待不安に該当する語りをしており，虐待不安尺度を作成し因子構造を検討した結果，【虐待自己評価不安（自己の育児について「虐待」と関連させて評価する際に生じる不安）】と【虐待他者評価不安（自分の育児について他者から「虐待」と関連させて評されることへの不安）】の 2 因子構造が得られていた。また，虐待不安の高さと自己効力感には負の，虐待不安と虐待傾向養育態度には正の相関が示され，少なからず虐待不安を抱くことが母親の精神的健康や育児の質に対しネガティブに働く可能性があることが明らかとなった。渡邉（2015）は，この虐待不安尺度の意義について，“本来ならば支援されるべき母親”を顕在化させることが可能となるだろうと述べている。

これらの否定的な感情の具体的内容の検討を目的とした研究によって，質問紙調査だけではとらえきれない母親の子育て背景を考慮した詳細で具体的な困難感や不安感が明らかになったと考えられる。また，これらの研究では，考察として具体的な支援策や専門家の支援方針について触れられていたため，子育てに対する否定的な感情の具体的な内容を検討することを目的とした研究は，支援の方向性や指針を得るために行われることが多いことが考えられる。

2）否定的な感情に対する対処方法の検討

前項にて紹介した武井他（2008），足立（2016），澤田他（2020）に加えて浅賀・三浦（2011）では，母親が子育てへの否定的な感情をどのように乗り越えてきたのか，もしくは，その思いをどのように軽減させているのかといった対処方法を検討していた。

浅賀・三浦（2011）では，育児において母親が抱える葛藤や問題を取り上げ，母親としての発達という観点から，それに対する適応プロセスを検討することを目的として，母親が育児において体験しうる心理的混乱をどのように乗り越え，その結果どのような変化が起こりうるのかということを，0～11 歳（1 名のみ 11 歳，他 11 名は 0～3 歳）の子どもを育てる母親 12 名を対象として育児初期を振り返ってもらう回顧的なインタビュー調査を行った。分析の結果，①育児最初期における心理的混乱の時期，②混乱を乗り越えつつある時期，③混乱を乗り越え，母親役割が内在化される時期という 3 つの時期があることが示され，子どもの可愛さだけではない大変な最初期を迎え，周囲のサポートを用いながら葛藤を克服し，克服したことによる心理的余裕をもとに自己にとっての積極的意味に気づき，母親としての実感を深化させることが可能になるプロセスが明らかになった。

これらの否定的な感情に対する母親の対処方法についての検討を目的とした研究の結果から，母親は周囲の人と関わりながら周囲のサポートを利用し，子どもや子育てに対する否定的な感情を軽減させたり，自身の認識を変えたり否定的な感情を抱く状況を回避したりしてその思いに対処していることが窺えた。

一方で，母親が否定的な感情に対してどのように対処しているかを検討することを目的としたこれらの研究は，暗に子育てや子どもに対する否定的な感情は，母親にとって対処し乗り越えるべきものであるという立場に立っているとも考えられる。

3）母親の認知世界についての検討

菅野（2001）や菅野他（2009）は，母親達のものの見方や不快感情に対する受け止め方そのものを検討することを目的として研究を実施した。

菅野（2001）では，育児のなかで当たり前に知覚される感情として，母親の我が子に対する不快感情（子どものことをイヤになること）を取り上げ，不快感情の内容とそれが生起した育児場面と，母親の不快感情に対する説明づけについて，1 歳～7 歳の乳幼児を育てる母親を対象にインタビュー調査を行った。そして，不快感情が育児の遂行と親としての適応にポジティブな役割を果たしている可能性と母親の不快感情の受け止め方を検討した。その結果，不快感情は，母親の子どもに対してこうなってほしいという期待と実際の子どもの行動との間のズレによって引き起こされていることが明らかになった。また，そのようなズレや不快感情は母親にとって子どもの育ちや自らの子育てを振り返るきっかけを作り，育児を方向づけることが示され，親の適応にも不快感情が役に立っている可能性が示唆された。

菅野他（2009）では，母親 24 名を対象に，母親の子どもに対する不快感情（我が子をイヤだと思うこと）を取り上げ，子どもが生まれてから 2 歳になるまでの間，縦断的にインタビュー調査を行っている。この研究では，特に不快感情の説明づけに焦点を当てて調査することで，母親達のものの見方を明らかにし，母親の適応と発達を検討することを目的としていた。ちなみに，この研究での“ものの見方”とは，澤田他（1992）の“母親が日常の育児実戦で用いている子どもや自らのかかわりを含めた子育てについての見方”という意味を採用している。分析の結果，母親達のものの見方は，子どもの育ちに単純に調和しながら変化しているわけではなく，目の前のわが子の育ち，子育ての方向性，母親自身の資源とのせめぎ合いを含むものであり，それらの要素は両義的な関係にあると考えられた。そして，生後 2 年間の母親の変化として，子どものことがわからないところから子どもの行動をパターン化し，1 歳の後半には人格をもった一つの主体として捉えるようになるプロセスと，世話・保護の対象から親の影響を受けるひとりの主体として子どもをとらえ，ソーシャライザーとしての役割を認識するようになるプロセスが得られていた。考察では，そのようなものの見方は，親子の関係性のなかで構築されるものであり，その関係性のなかで柔軟に変化することによって母親としての適応は実現すると述べてられていた。

母親達のものの見方や否定的な感情に対する受け止め方を検討することを目的とした研究は，前項にて紹介した，否定的な感情に対する対処方法の検討を目的とした研究よりは，母親達がどのように否定的な感情の受け止め，子育てをしているのかといった体験を比較的フラットに捉えていると言える。そして，このような研究から，母親は子育ての中で，母親の期待と実際の子どもの反応・行動との間のズレや自身のものの見方の中でのせめぎ合いといった，両義的で両立し難い認知や気持ちを抱いていることが示された。

4）母親としての発達・適応の検討

ここまでに紹介した研究の中で，菅野（2001），菅野他（2009），浅賀・三浦（2011）では，母親の否定的な感情を母親としての発達や適応のプロセスの中で捉え，子育てや子どもに対する否定的な感情が親としての発達や適応に向けてどのように変化するのか，親としての適応に子育てに対する否定的な感情がどのようなポジティブな影響を与えるのかについて検討している。

これらの研究の結果から，子育てに対する心理的混乱や我が子に対する不快感情といった否定的な感情は，母親が子育てや子どもとの関係性を振り返るためのきっかけを与え，その思いに対して柔軟に受け止めたり乗り越えたりすることを通して母親は，より適応的な子育ての指針や母子の関係性を築いていくことが明らかになった。

そして，このような否定的な感情が母親としての発達や適応に果たす役割を検討する研究によって，それまでネガティブな影響ばかりが主張されてきた子育てに対する否定的な感情の，肯定的な

側面や子育ての中での意味が見いだされたと考えられる。

3. 抽出された今後の質的研究における課題

ここまでに紹介した質的データを扱った研究の中で述べられている今後の課題について，いくつかの共通点が抽出された。

1）関連する要因を含めた分析の必要性

調査対象者の属性や育児環境，サポート資源と子育てに対する否定的な感情の関連を今後明らかにしていく必要があるという指摘（足立，2016；渡邉，2015；澤田他，2020）である。この課題は否定的な感情の具体的内容の検討を行った研究にて指摘されていた。質的研究で得られた具体的体験を支援やより広い子育て状況の把握に役立てていくためには，各変数との関連を量的研究等と合わせながら検討していく必要があるのだと考えられる。

2）子育ての「今」について尋ねる必要性

浅賀・三浦（2011）では，“（今現在の子育て体験について尋ねるインタビューでは）当時の混乱についてこれほど意識化されたかたちでの語りはなされなかったかもしれない。（中略）一方で，そのような（回顧的な）語りだからこそ明らかにできた点もあるだろう”と述べている。一方で，浅賀・三浦（2011），足立（2016），澤田他（2020）では，インタビューが回顧的になったことで，記憶の曖昧さやリアリティの不足が生まれた可能性を今後の課題として，子育て中にある母親に「今」のことを語ってもらうインタビューの必要性を指摘している。そのため，回顧的なインタビューは，体験を振り返ることで，意識化・言語化された母親の体験を検討できる面がある一方で，母親が子育てをしている「今」感じているありのままを結果に反映しきれない面があると考えられる。

3）母親の心情をより詳細に検討する必要性

菅野他（2009）では，不快感情の説明づけに焦点を当てて分析するために，分析の過程で生成された「心情」カテゴリ（“イヤ”という感情の位相を表すカテゴリ）を分析の対象から外した。しかし，菅野他（2009）では，今後の課題として，その心情カテゴリを詳細に検討することを挙げている。また，渡邉（2015）も，虐待不安が母親の心理の中でどのように生まれどのように受け止められているのかといった，発生機序や心理的帰結を丁寧に検討していくことを課題としている。このように，母親の気持ちや感情そのものやその抱え方を丁寧に検討していくことが必要であると考えられる。

4）分析対象者から外れた母親を検討する必要性

今回展望した研究は全て，子育てに対する否定的な感情を認識しながらも子育てをある程度健康的に続けている母親を対象とした研究であった。しかし，菅野（2001）では，子育てを続けている母親に焦点を当てたが，育児を続けていくことのできなくなった母親に焦点を当て研究することも重要な課題だと指摘している。澤田他（2020）では，対象は虐待や抑うつのリスク因子を持つ母親を含んでいないため，リスクを持つ母親に当てはまる結果と言えないと述べている。一方で，浅賀・三浦（2011）は，分析対象者からは除いたが調査協力者の中には心理的混乱を経験していない母親もいたことから，混乱を経験していないと語る母親が母親になったことによって何を体験しているのかが明らかにできていないことを限界と今後の課題として述べている。このようなことから，より個別性の高い多様な母親像を，質的研究の特質を生かして明らかにしていくことが課題とされていると考えられる。

Ⅳ　総合考察

1. 否定的な感情をありのままに捉えるための課題

今回の文献展望から，質的データを扱った子育てへの否定的な感情の研究の目的は①否定的な感情の具体的内容の検討，②対処方法の検討，③母

親の認知世界の検討，④母親としての発達・適応の検討の 4 つに大別できた。これらの目的に焦点を当てた質的研究は今後も発展させるべき重要な研究であると考えられる。一方で，対処方法を検討する研究は，子育てに対する否定的な感情は，母親にとって対処し乗り越えるべきという立場にあると考えられる。母親としての発達・適応を検討する研究についても，子育てに適応している母親像のみを強調してしまう可能性がある。しかし，現実には子育てに対する否定的な感情を乗り越えられていない，もしくは対処しきれていない，抱えたまま子育てを続けている母親が多いと考えられる。実際に，子育てに対しての負担や否定的な感情を感じながら，未就学児を育てている親が多数いることは事実である（ベネッセ教育総合研究所，2022；厚生労働省，2007）。そのため，親としての適応や否定的な感情の対処の検討を目的とした研究によって描きだされる母親像は，母親の生きているリアルな体験とはやや離れてしまう可能性に加え，偏った母親の“あるべき姿”を押し付けてしまうという危険性があるという課題が残る。したがって，母親の子育てに対する否定的な感情の機能面だけではなく，その感情の主観的体験として母親から語られたデータをあるがままに捉え，丁寧に分析し記述することが今後の研究の課題と言える。

そして，そのような研究をするためには，研究者が子育てに対する否定的感情は抱いて当然であるという立場に立ち，研究が母親の理想像の押しつけになってはいないかという点に注意する必要がある。そのために，研究者が自身の立場について常にモニタリングし，この研究をどのように社会や母親，支援者に届けたいのか，どのように支援につなげたいのかを研究内で明示する必要があると考えられる。今回展望した研究にも，子どもや子育てに対する否定的な感情は，どのような母親も抱きうる思いであるということが強調されていたものが多かった（浅賀・三浦，2011；澤田他，2020；菅野，2001；菅野他，2009）。研究者の立場や方針の明示と研究者が有するバイアスに対するモニタリングは，質的データを扱う研究全般の課題とされているが，社会的な固定観念が根強い子育て研究ではより重要な課題であろう。

2. 否定的な感情の主観的体験に関する研究の展望

今回の文献展望から，子育てに対する否定的な感情に関する研究は，子どもの発達や虐待等の不適応的な養育行動の要因として量的変数に還元し扱う研究に加えて，その思いを母親が抱くことは当然であるとして，その具体的内容の検討や否定的な感情の意味や機能が検討される研究が増えてきた段階であることが明らかになった。しかし，母親が抱く否定的な感情の主観的体験に関する本邦での研究は未だ少ない。一方で，子育てを親になる経験としてとらえ，成人期発達という視点などにより母親自身の体験をとらえようとする研究は漸増している（浅賀・三浦，2008）。子育てに対する否定的な感情を抱く母親の主観的体験に関する質的研究も今後増えていくことが期待される。そこで最後に，今後の母親が抱く否定的な感情の主観体験を検討する研究の展望を述べる。

1）否定的な感情の抱え方の検討

先行研究でも繰り返し述べられていたが，子育てに対する否定的な感情を全く経験しない親はいない（Deater-Deckard，2004）。そして，その否定的な感情を対処せずに，抱えている母親の方が多いのではないかと考える。そのため，より母親のリアルな体験を検討するために，子育てに対する否定的な感情を抱えながら子育てをしていく体験を質的に検討していくことが必要だと考えられる。

2）母親の支援に対する主観的体験の検討

先行研究では，質的研究の結果支援者が工夫すべきことは述べられていたが，否定的な感情を抱く母親が子育て支援サービスについてどう感じて

おり，どのような気持ちでサービスを利用しようと思うのかといった，母親側からの体験が子育て支援を検討するためには重要であると考える。

3）否定的感情は当然だという心理教育の検討

研究の中や研究者間では，否定的な感情を母親が抱くことは当然であるという認識はある程度共有され始めていると考えられる。しかし，否定的な感情を抱いてはいけないという信念に最も苦しめられるのは母親本人である。したがって，否定的な感情を抱くことは当然であるという，母親と母親の周囲の人々に対する心理教育の構築とその効果の検証が今後は求められると考える。

母親の主観的体験に関する質的研究は未だ少なく，先行研究や社会的意識がもたらした母親のあるべき姿と，実際の母親の生きている体験との間には未だ大きなギャップがあると考えられる。母親の体験に寄り添う支援に活かし，母親の体験と一般社会に根強く残る母親のあるべき姿とのギャップを埋めるためにも，母親の子育てに対する否定的な感情の主観的体験をありのままに検討し，社会に発信する研究が必要であると考える。

文献

足立 千晶（2016）．産後早期の初産婦における育児の辛さとその軽減要因に関する研究――産後 4 ヶ月までの過ごし方に関する母親への回想的インタビューに基づいて――　日本幼少時健康教育学会誌，*2*(1)，25-33. https://doi.org/10.34392/healtheduchild.2.1_25

浅賀 万里江・三浦 香苗（2008）．育児における女性の心理的体験に関する研究の今後　昭和女子大学生活心理研究所紀要，*11*，49-56.

浅賀 万里江・三浦 香苗（2011）．育児初期の母親が抱える心理的混乱への適応過程――語りの分析による質的検討――　昭和女子大学生活心理研究所紀要，*13*，55-68.

荒牧 美佐子（2016）．幼稚園における子育て相談の効果検証――育児への不安感を指標に――　目白大学総合科学研究，*12*，35-43.

浅川 潔司・鎌田 陽世・横川 和章・古川 雅文（1999）．母親の育児感情の構造に関する研究　兵庫教育大学研究紀要，*19*，139-143.

東 雅代・西村 真実子・米田 昌代・井上 ひとみ・梅山 直子・宮中 文子・堅田 智香子・和田 五月・松井 弘美（2009）．乳幼児をもつ母親の育児困難の状況――母親および子育て支援に関わるエキスパートへのフォーカス・グループ・インタビューから――　石川看護雑誌，*6*，1-10.

ベネッセ教育総合研究所（2022）．第 6 回幼児の生活アンケート ダイジェスト版

Deater-Deckard, K. (2004). Parenting stress　*New Haven and London : Yale University Press*.

Harold, R. D. & Bolea, P. S. (2000). Telling the family story : The backdrop. In R. D. Harold, (Eds.), *Becoming a family: Parents stories and their implications for Practice, policy, and research* (pp. 1-14). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.

岩堂 美智子・松島 恭子（2008）．臨床心理士の子育て支援――その理論と実践事例――　創元社

柏木 恵子（1995）．歩行開始期における母子の共発達：子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討　発達心理学研究，*14*，257-271. https://doi.org/10.11201/jjdp.14.257

柏木 恵子（2003）．家庭心理学――社会変動・発達・ジェンダーの視点――　東京大学出版会

川井 尚・庄司 順一（1995）．「育児不安」これまでとこれから　子ども家庭福祉情報，*10*，39-42.

河野 古都絵・大井 伸子（2014）．3 歳児をもつ母親の育児不安に影響する要因についての検討　母性衛生，*55*(1)，102-110.

金城 志麻（2015）．母親の子どもの感情認知が育児自己効力感へ及ぼす影響――母親の“ego-resilience”との関連から――　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要，*6*，1-10.

厚生労働省（1999）．平成 10 年度版厚生白書

厚生労働省（2003）．平成 15 年版厚生労働白書

厚生労働省（2007）．第 6 回 21 世紀出生児縦断調査の概況

厚生労働省（2014）．「健やか親子（第 2 次）」について――検討会報告書（概要）――

厚生労働省（2020）．令和元年度福祉行政報告例の概況

京藤 広果（2023）．育児観・子育て観と育児不安・子育て不安の研究動向と要因についての検討　甲南女子大学大学院論集，*21*，13-21.

Liu, L. & Wang, M. (2015). Parenting stress and children's problem behavior in China: The mediating role of parental psychological aggression, *Journal of Family Psychology*, *29*, 20-28.

前田 薫・中北 裕子（2017）．乳幼児をもつ母親の育児ストレスの要因に関する文献検討　三重県立看護大学紀要，*21*，97-108.

牧野 カツコ（1982）．乳幼児をもつ母親の生活と育児不安　家庭教育研究所紀要，*9*，1-13.
村上 京子・飯野 英親・塚原 正人・辻野 久美子（2005）．乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析　小児保健研究，*64*(3)，425-431.
内閣府（2007）．平成 19 年度国民生活白書――つながりが築く豊かな国民生活――　東京：時事画報社，1-118.
内閣府（2015）．仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）レポート 2015
内閣府（2016）．6 歳未満の子供を持つ夫の家事・育児関連時間
中山 まき子（1994）．子どもをとりまく家族・社会・文化と「ジェンダー」との関わり　発達心理学研究，*5*，84-85.
中山 智哉・渡邉 望・春高 裕美・木山 徹哉（2013）．母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的検討――母親の育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連――　九州女子大学紀要，*50*(2)，15-29.
小川 佳代・中岡 泰子・富田 喜代子・前田 宏治・加藤 孝士・高橋 順子・石原 留美・尾崎 八代・中澤 京子・三木 章代・吉村 尚美・江口 実希（2013）．A 県における子育て支援ニーズに関する調査研究（その 2）――育児ストレッサーの因子構造――　四国大学紀要，*40*，13-19.
岡本 大輔・磯部 美也子・大澤 香織（2020）．否定的・肯定的育児感情が母親の養育行動の生起頻度に与える影響　応用心理学研究，*46*(2)，187-187. https://doi.org/10.24651/oushinken.46.2_186
大日向 雅美（1991）．親としての発達　日本児童学研究所（編）　児童心理学の進歩，*30*，（pp.153-179）　金子書房
大島 聖美（2013）．中年期母親の子育て体験による成長の構造――成功と失敗の主観的語りから――　発達心理学研究，*24*(1)，22-32. https://doi.org/10.11201/jjdp.24.22
Phoenix, A. & Woollett, A. (1991). Introduction.　In A. Phoenix (Eds.). *Motherhood: Meanings, practices, and ideologies* (pp.1-12), London: SAGE Publications.
Raeff, C. (1994). Viewing adolescent mothers on their own terms: Linking self-conceptualization and adolescent motherhood. *Developmental Review*, *14*, 215–244. https://doi.org/10.1006/drev.1994.1009
Sabatelli, R. M. & Waldron, R. J. (1995). Measurement issues in the assessment of the experiences of parenthood. *Journal of Marriage and the Family*, *57*, 969–980.
佐藤 美樹・田高 悦子・有本 梓（2014）．都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因――乳幼児の年齢集団別の検討――　日本公衛誌，*61*(3)，121-129. https://doi.org/10.11236/jph.61.3_121
佐藤 淑子（2015）．ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ父母の育児行動と育児感情――日本とオランダの比較――　教育心理学研究，*63*，345-358. https://doi.org/10.5926/jjep.63.345
澤田 明菜・鏡（関塚）　真美・太田 良子・毎田 佳子（2020）．産後 1 か月から 4 か月までの母親がもつ育児ストレスと対処行動　日本看護科学会誌，*40*，270-278. https://doi.org/10.5630/jans.40.270
澤田 英三・鹿島 達哉・南 博文（1992）．母親の素朴な発達観の特徴と構造について――事例研究――　広島大学教育学部紀要，41，89-98.
石 暁玲・桂田 恵美子（2008）．幼児の情緒的・行動的問題に関わる諸要因――母親の育児不安と早期保育および子どもの生活状態からの検討――　家族心理学研究，*22*(2)，12-140. https://doi.org/10.57469/jafp.22.2_129
島田 葉子・杉原 喜代美・橋本 実里（2018）．育児ストレスや育児不安，育児困難を抱える母親への育児支援の実際とその効果についての文献レビュー　足利大学看護学研究紀要，*7*(1)，69-81.
菅野 幸恵（2001）．母親が子どもをイヤになること――育児における不快感情とそれに対する説明づけ――　発達臨床心理学研究，*12*(1)，12-23. https://doi.org/10.11201/jjdp.12.12
菅野 幸恵・岡本 依子・青木 弥生・石川 あゆち・亀井 美弥子・川田 学・東海林 麗香・高橋 千枝・八木下（川田）　暁子（2009）．母親は子どもへの不快感情をどう説明するか――第 1 子誕生後 2 年間の縦断的研究から――　発達心理学研究，*20*(1)，74-85. https://doi.org/10.11201/jjdp.20.74
Swigart, J. (1991). The Myth of Bad Mother. Bantam Doubleday Dell Publishing Group, Inc.（スウィートガート, J.　斎藤 学（監訳）（1995）．バッド・マザーの神話　誠信書房）
庄司 一子（2003）．子育て中の母親が抱く虐待不安　日本教育心理学会総会発表論文集，*45*，737.
武井 祐子・寺崎 正治・髙尾 堅司・門田 昌子（2008）．養育者の面接からとらえた育児不安についての質的研究，*18*(1)，219-225.
戸田 まり（1996）．発達心理学における成人期（1）――「親」はどう捉えられてきたか――　北海道教育大学紀要，*46*，41-52.
富岡 晶子・前田 留美・新町 豊子（2005）．育児支援に関する研究の動向と課題　川崎市立看護短期大学紀要，*10*(1)，1-10.
東京都福祉保健局（2003）．児童虐待の実態(白書)
東京都福祉保健局（2005）．児童虐待の実態Ⅱ――輝かせよう子供の未来，育てよう地域のネットワーク――

渡邉 茉奈美（2015）．「虐待不安」の構造――虐待不安尺度作成の試み――　子育て研究，*5*，41-51. https://doi.org/10.24719/jscr.k05005
山田 昌弘（1997）．援助を惜しまない親たち　宮本 みち子・岩上 真珠・山田 昌弘（著）　未婚化社会の親子関係（pp. 7-96）　有斐閣
吉田 弘道（2012）．育児不安研究の現状と課題　専修人間科学論集心理学篇，2(1)，1-8.